

ラオスでしか出来ない経験

1. はじめに

私は今回参加するにあたって以下の二つの面から応募、参加を決意した。大学での専攻分野が教育であるので、日本が海外に教育の面においてどのようなアプローチを行なっているのか。海外の教育がどのようになされているか。また、教育分野以外、例えば経済や政治などにおいても発展途上国がどのような状況であるのかの実態を把握すること。それに対して自分なりに意見を持つこと。ラオスに行くまで、情報収集を団員と行ったが、情報の取捨選択を行なっていく中で、文献も少なく、インターネットによる情報も少ないことが分かった。また、友人とラオスについて話をしようとしても、そもそも友人たちはラオスがどこにあるかもわからず、何が有名かもわからない状況で、出発する直前までラオスはまだまだ未開発地が多く発展途上国でもまだまだ発展の進んでいない場所なのであろうと勝手に思っていた。

2. ラオスでの経験と得た知見

ラオスに到着して初日、首都ビエンチャンの空港が整備されている様子を見て、自分が考えていたよりも発展されている印象を受けた。またラオス現地に着いてからは様々な施設に訪問したが、やはり私が印象に残っていることは教育関係の施設ばかりである。

ラオスに到着してすぐにYさんの図書館活動場所に赴いた。そこで行われた日本文化紹介は、私が文化紹介係であったこともあり、もちろん楽しかった。一方で、Yさんの話の方もとてもためになったのである。Yさんによるとラオスは、図書館施設が十分でないYことは勿論、本の数も圧倒的に少ないという。また、さんが図書館を設立した場所は比較的田舎であり、そこに住んでいる人も裕福ではない人が多い。安井さんの話を聞いていく中で私は二つ印象に残っていることがある。

一つ目は、幼い頃における読書の大切さだ。Yさんの図書館施設に来ていた子供で初めて、大学に合

格した子が今年いるそうだ。図書館は小学生に向けて作ったそうだがその子は本が好きで、中学生になっても来ていたそうだ。これは私の予想だが、ラオスでは、インターネットが日本ほど普及しているわけではない。だから、子供たちは自分が経験したことの無い世界を本を通して経験できる。また、視野を広げたり、言葉の言い回し、表現を知ることができたりするツールであると考ええる。読書をすることで楽しみながら知識を増やすことができるのではないのだろうか。しかし、日本では、特に私の場合、本以外にもスマートフォンやテレビ、ゲームなど本以外にたくさんの楽しめるツールが存在していた。また、そちらの方が状況の展開も早く本離れの一因となっている。しかし、視覚からによる情報が多いため、頭を使わない。本離れ、幼少期による本の学習の面での影響と重要さは、改めて考えることができた。

二つ目はYさんが何回も口にしていたセリフだ。

「生まれた環境を超えて欲しい。」先程述べたように、Yさんの図書館施設に来る子供は裕福ではない。裕福でないために、家族、主に両親は教育に関心が少ないそうだ。中学生になって図書館に行くよりも自分の家の仕事の手伝いをしてほしいという意見をもっている親も多い。日本に住んでいる私にはとても衝撃な事実であった。それと同時に私の今までの知識、経験の不足さを痛感した。発展途上国、特に田舎の地域では親が十分な教育を受けたわけではないため、教育に関しての重要性がまだまだ不足していると感じた。子供に十分な教育を受けさせることも大事だが、発展途上国ではまだまだ親への教育の大切さを知らせることや、親への教育が必要であることも感じた。Yさん自身も親への教育の理解が無ければ子供の学力を上げることが難しいそうだ。実際に学習を諦め、親の生計の手伝いをする子供もいるようで、やりきれない思いになるという。このような現状もあるなかで、大学に合格した子は安井さんが親への教育への理解を促したこと。その子が本をたくさん

読んだことなど様々な要因で、大学に合格できたのだと話していた。私は、日本で挙げられている子供の貧困の問題や、親の収入と子供の学力の影響などを考えていたが、大切なのは生まれた環境をこえる子供の強い意志と、周りの理解、協力がその子の人生を作っていく中でとても大切な事なのだろうと、ラオスから学んだ。

JICAラオス事務所ではオフィスに飾られていた様々な資料がとてもためになった。私は家庭科教育の学習を大学でも行なっている。そこで見た資料には、海外青年協力隊が作ったのであろう衛生教育や家庭科教育に関連する教科書の展示がされていた。ラオス語で書かれていたため、正確に理解はできていないが、写真がとても多く、ラオス語がわからないわたしにも手の洗いや食器の衛生管理方法などが分かる。家庭科教育は日本の教育現場では重要視されていない印象であったが、食事や衛生の管理、食育など、生活に一番密接している教科であると共に、重要性の高い教科であると感じた。実際に、私が中学生や高校生であった時、私や周りの友人は家庭科教育は受験に使うものでもなく、週に多くて2回の授業なので重要視しなくて良いだろうと考えていた。しかし、大学生になると、料理は勿論、消費者教育や住環境など、生活していく上で必要なスキルを教えてもらえる大切な授業であることに気付いた。私は、自分が教えた生徒には、あとから後悔しないように授業を受けてほしいので、身につく生涯使える知識が身につく家庭科の授業が行えるようになりたい。そう思える経験になった。

また、JICAに携わっている人との夕食会でラオスの現状とラオスでの生活、ラオス政府がこれからどのような支援をJICAが求めているかの話をした。その中で、ラオス人の全体の性格として家族を大切にすることをラオスで生活している日本人が口を揃えて言っていた。家族を大切にするので仕事も行けりけれども仕事をたくさん行いたくさんのお金を稼ぐよりも家族の時間を大切にしたい。という印象が多かった。そのようなラオス人の性格の一方でラオス政府は経済成長を望んでいる。私は、ラオスではベトナムやタイのような発展途上国が発展してきたことと同じような経済発展は難しいと考えた。国際系の大学や経済学部ではないため、これが正しいとは一概には言えない。また、解決策が見えているわけではないが、ラオス人の性格、風土、今の生活にラオスの現地人が満足しているのかどうかをきちんと聞いて考えた上での発展を行っていくことも大

切なのではないかと考える。JICA職員との夕食会で、自分が考えていた意見などを交換していく中で、自分はまだまだ視界が狭い事。経済や政治の面においては一般常識の欠如も感じた。教育分野にのみ興味を示すことが一概に悪いとは言えない。しかし自分の視野が狭く、様々な分野においても知識、理解と意見の充足が必要であると感じた。そのためには勿論自分自身で学習して知識を増やすことも大事であるが、様々な専門分野に長けている人と話をすることや理解を深める経験も自分には大事である。

チャンパーサック教員養成学校では海外青年協力が現地でどのような活動を行っているのか生の声を聞くことができた。そこでは、算数の教科書を東京書籍との協力を得て改訂を行ったこと、ラオスでは教科書の改訂があまりない事を知った。実際に日本が改訂を行った算数の教科書を見てみると自分が小学校の時に見た教科書とあまり変わらず、わかりやすさと見やすさを感じられた。施設設備の状況においても、わたしが予想しているよりも充実しているように感じた。理科実験室においては人体模型や胎児の成長過程など飾っていたが果たして活用はできているのだろうかと感じた。学校の図書館においても本の数も多くはないが似ている本が多く、安井さんが仰っていたように、まだまだ文献の数の充足や種類の拡大の必要性和それにおける予算の割り当ての強化が必要なのではないかと思った。

PJSEZ（パクセー・ジャパン日系中小企業経済特区）では日系中小企業が何故パクセーに工場を置こうと思ったのかの経緯やこれからの展望を伺うことができた。その中で一番印象に残っている企業は日本剣道具製作所だ。私はまず、剣道具と聞いた時にラオスで行う必要性和意外性に着目した。ラオスは日本では他の発展途上国に比べ認知度が低い印象があった。そのようななか何故ラオスに目を向けたか質問を行うと、ラオス人手先の器用さと性格に着目したそう。実際、剣道具の製造過程を見ていくと裁縫が多い印象であった。家庭科教育の学習を大学で行なっているため、どのような技術を使っているのか、どれくらい集中しているのかを見ていたところ、日本人に比べてとても手先が器用であるのが一目瞭然であった。海外に工場を置く際、様々な要因で置く場所を絞る職人だからこそわかる視点もあるのかと新しい気付きも獲得できた。

托鉢経験では、宗教的な習慣の違いや、そもそも宗教に対して知識がたりていないことを感じた。日本とラオスでは仏教の種類が違うことは、わかっている。しかし、英語でどのような宗教でどのような意味のある儀式であるのかを、説明しているラオスの学生の熱意を肌で感じ、日本人としての誇りや、意識の低さを痛感するとともに恥ずかしささえも感じた経験となった。

ADDP（アジアの障害者活動を支援する会）でも、様々な経験ができた。特別支援教育にも興味があるため、とても興味のある施設の一つであった。私は、まだまだ日本も障害者に対しての教育、職場、周りの対応はまだまだ遅れていると思っている。そんな中で日本のNPO法人としてラオスに対してどのような障害者支援を行っているのか興味があった。現職の新井さんにどのような職業支援を行っているのか質問した。すると、障害者のための職場の提供は少ないどころか障害者が働くという観点がまだまだ足りていないという話であった。ADDPには「みんなのカフェ」というカフェがあった。そのカフェで販売されているクッキーは知的障害者が作り、耳に障害があるろう者が接客をしている。このような活動に注目してもらう事で障害者は働くことができるのだという障害者への希望や、他の職場に対しての呼びかけのような運動をしていると聞き、納得した。また、障害者への希望を持たせる一つとしてスポーツをあげていた。何も出来ないという意識から出来る喜びを与える事の一要素としてスポーツがある事を聞き、実際特別養護学校でも体育の授業が多いことから、体を動かすことでの心の健康への影響は少なからずあるのではないかと考えた。

Cope Visiter Center（コープビジターセンター）では新たな考えも得た。不発弾による影響で今までの生活から変わった人の絶望や現状を聞いた。今までも様々な貧しい家に暮らす人々の生活を見てきたが、彼らには楽しさや笑顔が見られた。しかし、第三者からの被害で今までの生活が行えず、貧しくなり家族にも影響が及んでいる人の絶望や涙、現状を見た際に、どのようなアプローチを行うべきなのか。日本人の私はとても平和ボケしていること。幸せとはなんなのか。世界中の人が幸せだと感じるためにはどのような状況が重要であるのかなど様々な答えのない考えが巡った。普通に生活ができていて、お金を稼ぐために命や身体をかけてまで働く必要がないこと。家族や友人、たくさん

の人の協力のおかげで今の私が存在していることに感謝が尽きない。

3. 国際青年交流会議にて

ラオスで得た経験や考えは以上だが、帰国後研修でも沢山のことを得た。私は大学がユネスコスクールということもあり、ESDについての活動を行っていた。現職の教員の方がどのように授業や様々な活動でESDを取り入れているのかの会議の運営や参加したこともあるが、何が正解かわからなかった。しかし、国際青年交流会議でSDGsに関連したディスカッションを行なっていくと、持続可能な社会にしていくために何をすればいいのかは個人、各団体が考え、行動を起こすことがSDGsに繋がるのであり、その考えの指針にSDGsが存在しているのかという、視点の移動を行うことができた。更に、SDGsを、よくよく見ていくと、発展途上国のために先進国諸国は何か出来るのかという、先進国に住む自分たちの生活には直接関わってこない目標が多い。だから、何を具体的に行えばいいのかわからない状況だったのだと感じた。これからどのように対策を行なっていくべきかを考えなければならぬ。また、大学がユネスコスクールであるのにもかかわらず、学生がSDGsに関しての知識や存在の浸透がまだまだであるように感じる。この状況を少しずつでも変える必要があるのだとも感じた。

4. 最後に

このように、国際青年育成交流事業に参加して、様々な現状を改善していくには教育が大前提である事を感じた。教育に関しての学習をしていく上で、まだまだ私には教育に関しての知識も不足している。教育だけでなく日本の基礎知識、世界の知識もまだまだであると感じた。今までの私は自分さえ今の状況さえ良ければいいと思っていたが、この状況では持続可能な社会は創れない。これからの私に必要な力や知識はまずは様々な観点の知識を増やすこと。様々な現場を目で見て感じる事。色々な人の意見を聞き、納得するまで話し合いを行うこと。自分の今までの態度を改める機会になった。大切なのはこの機会得たこの大切な経験を衰えさせず発展していくことである。これからも様々な状況にアンテナを張り、自分の意見を持つ事を忘れないようにしていきたい。